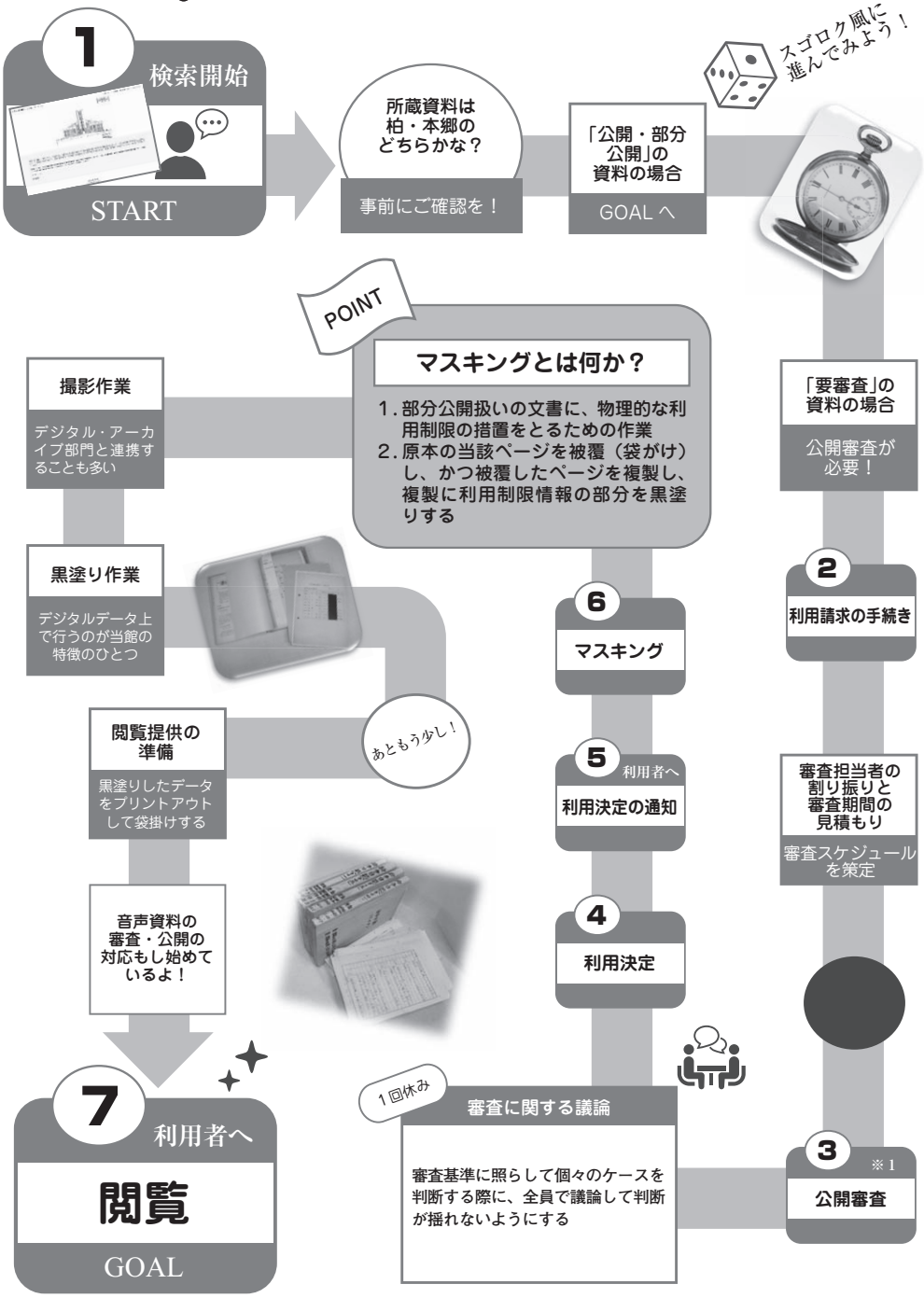
東京大学
文書館ニュース

The University of Tokyo Archives Newsletter

vol. 62, Mar. 2019

利用請求から閲覧提供まで
～我々の仕事、お見せします～



※1「東京大学文書館における特定歴史公文書等の利用請求に対する利用決定に係る審査基準」（当館 HP 参照）

Contents

2 私をとりまくアーカイブ、これからの私の仕事　星野　厚子

4 東京大学文書館デジタル・アーカイブの利用促進のための取り組み　宮本　隆史

5 東京大学文書館デジタル・アーカイブを利用しての所感　橋本　陽

6 資料の公開について
文書館トピックス　木島隆康教授に聞く、絵画の修復・保存　小根山美鈴

7 業務日誌（抄）（2018年8月～2019年1月）

8 文書館トピックス
柏キャンパス一般公開～「知の蔵、文書館」へようこそ　秋山　淳子

2019 年に期待する漢字

跳

大きく跳ねたいという期待のもと、館員一同邁進いたします

2018 年を振り返って

洪

あふれるくらいの業務に追われましたが、多方面での活動が増え、それらの活動が注目されることなどによって、漢字のもう一つの意味である「広さ・大きさ」のある一年になりました。

東京大学文書館
The University of Tokyo Archives

私をとりまくアーカイブ、これからの私の仕事

東京大学文書館学術支援職員　星野　厚子

はじめに

東京大学文書館。「ぶんしょかん」と読むのか「もんじょかん」と読むのかも定かではなかった私が採用され、10ヶ月が経過した。それまで私が過ごしてきた時間の多くは、邦楽、とくに、近世に成立した三味線音楽である長唄を中心とした、形として残らないもの、すなわち「無形」の要素の多い環境だった。音楽といっても、実技の習得と伝承、演奏資料の研究、実演者へのインタビューなど、アプローチの方法は様々である。それらを実際におこなってみて、「無形」に分類される事柄はもちろんアーカイブの対象であり、その方法も多岐にわたることを強く認識した。着任の自己紹介として、これまでの音楽体験に基づいて、「無形」のアーカイブについて試論したい。

1.「無形」のアーカイブとは

芸能や、ものづくりの制作技術は、形としては残らない。何かの方法で記録することで、初めてアーカイブ化が実現することになる。芸能にしても制作技術にしても、伝承の方法は、口伝えや直接の指導によって現在まで継承されている事例が多い。そのため、伝承を受ける側が備忘のために記録をとるなど、とうぜん記録方法は一定ではないし、体系化されていない場合が多かった。しかし、時代とともに従事者の減少が加速した結果、伝承が危ぶまれる状況から記録保存が急務となり、聞き取り調査や音声・映像を駆使して記録を残す事例が昨今は多くみられるようになった[1]。

さて、現在の、音楽の記録・保存の一般的な方法は、録音・録画であろう。ただし、完成された音楽の記録だけでは不十分である。「無形」のアーカイブにおいては、伝承経路・手順・方法といった、完成までの道筋も重要な記録対象として位置づけられているため、記録の意図を満たすふさわしい手段での記録作成が不可欠となる。

2. 音楽をめぐるさまざまな記録 ― 長唄を例に

前述のとおり、私は近世邦楽の長唄に、実技と資料研究の両面から携わってきた。長唄を例に、伝承と記録の方法について概観しよう。

まず、実技の伝承は、口頭伝承によっておこなわれる。師と対面して座り、唄と三味線をそれぞれ別々に教わる。複数回の稽古で曲の最後までゆき、その後は自己鍛錬を重ねることで身体に刷り込ませる。ここまでは西洋音楽とほぼ同じ方法だが、大きく異なることは、楽譜の使われ方だ。長唄にも楽譜はあるが（後述）、楽譜への依存度はそれほど高くなく、あくまでも枠組みである。師の手本を自身の備忘のために記号などを駆使して書き留めたものが習得の規範となる。

次に、長唄の資料研究について紹介する。長唄は、18世紀初頭から、歌舞伎の伴奏音楽として、江戸で成立・発展した三味線音楽のため、歌舞伎興行にかかわる資料、すなわち、歌舞伎の上演に併せて発行された上演記録である番付や長唄正本（しょうほん）が一次史料となる。番付からは、役者や演奏者の情報が得られ（図1）、長唄正本からは、演奏者の情報や上演時の歌詞が得られる（図2）。また、実演者側の資料として、自分が出演した舞台を日記のように書き付けたものも残っている。例えば、長唄三味線方で多数作曲もした三世杵屋勘五郎（きねやかんごろう。1815～77）が筆録した演奏記録『御屋舗番組控（おやしきばんぐみひかえ）』[2]では、いつ・どこで・だれと・何の曲目を演奏した、という情報が

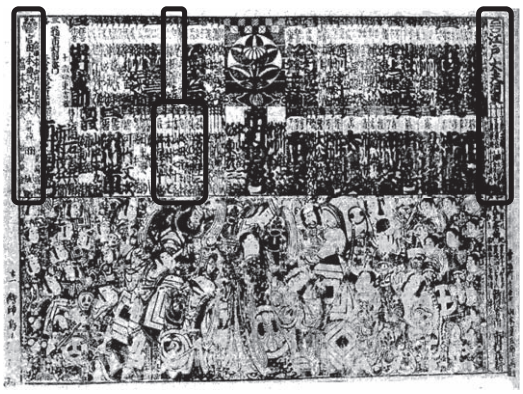


図1　寛政4（1792）年市村座顔見世番付（『芳村家之代々』より）
＊枠で囲った部分に演奏者名の記載がある。

図2　長唄正本《教草吉原雀》（明和5[1768]年11月初演）表紙
（日吉小三八氏所蔵）

得られるため、当時の演奏者のコミュニティや人気の演奏曲目がわかる上、現存する曲目の伝承経路をたどるための一級資料となる。

それでは実際の音楽情報についてはどうか。長唄正本には、歌詞の横に旋律の名称や記号を用いた音楽情報が付されていることもあり、250年以上前の作品の旋律を紐解く手がかりとなる場合もある（図3）。とはいえ、西洋音楽に見られる作曲者自筆の楽譜というような、「原典」を確固たるものとして位置づける記録の概念はあまりなかったようだ。そのため、作曲（初演）当時の旋律を忠実に再現することは難しい。長唄正本から、旋律名称を知ることはできても、それが現在の旋律と一致しているとも限らない。長唄の楽譜の成立は、明治以降に西洋音楽の理論に則って整備された五線譜や数字譜[3]であり、体系化しはじめたのはその歴史においては新しいといえる。

また、音楽の記録で一般的なものは、録音である。明治30年代から、邦楽のレコード録音がおこなわれ始め、長唄も、六世芳村伊十郎（よしむらいじゅうろう。1859～1935）や四世吉住小三郎（よしずみこさぶろう。1876～1972）といった、当時を代表する演奏家の録音がSPレコードとして現存

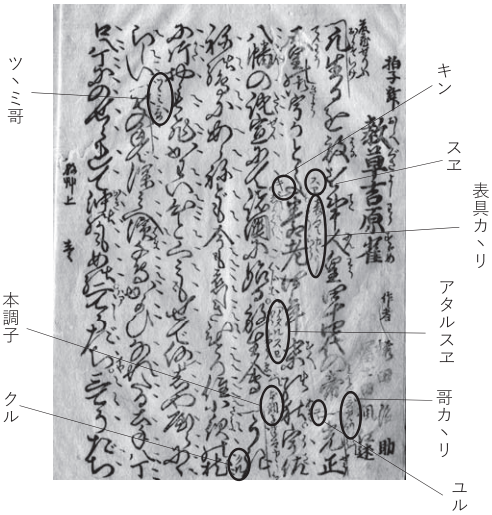


図 3 《教草吉原雀》歌詞と音楽情報

している。六世岡安南甫（おかやすなんぽ。1874 ～ 1915）は将来を嘱望されながらも若くして病没した長唄唄方だが、六世伊十郎と演奏仲間であったことで、SP レコードにその唄が奇跡的に残ったという例もある[4]。

もう一つ、実演者による芸談や聞き書きも重要な記録資料である。例えば、長唄三味線方の二世稀音家浄観（きねやじょうかん。1874 ～ 1956）の『長唄浄観』[5] や、囃子方の初世田中凉月（たなかりょうげつ。1904 ～ 79）の『田中凉月歌舞伎囃子一代記』[6] は、生い立ちから舞台の出演記録に至るまで詳細に語られている。多くの場合、聞き手や編者という第三者が介在し、最終的にまとめられる。研究利用には記載内容の客観的な確認を必要とする場合もあるが、語られた内容は、曲目や演奏技術のことから派生し、その人が若いころに出会った名人の話、現在は伝承が途絶えて廃曲となった作品の演奏経験など、アーカイブすべきことの宝庫といえる。

このように、長唄ひとつを取り上げてみても、様々な立場から様々な方法で伝承と記録がおこなわれている。忘却との闘いともいえる「無形」のアーカイブは、記録する対象へのアプローチの方法が多岐にわたるため、記録・保存の方法が体系化されにくいことが特徴である。まず記録対象の特性を理解し、それらを満たすアーカイブの構築をおこなうことが不可欠だろう。

3．記録・保存から利活用に向けて ― 卒業アルバムの情報入力を通して

「記録」の方法や考え方は、時代や立場によって、大きな違いがある。また、当事者が実用のために残すことと、周縁者が保存のために残すことでは、目的や方法が異なることもやむを得ない。

当館スタッフとして着任後、最初に取りかかったのが卒業アルバムのメタデータおよび検索ワードの整備だった。当館では、明治 41 年から平成 10 年に至るまでの 120 冊以上の卒業アルバムを所蔵している（資料群：F 0025）。卒業アルバムの閲覧および貸出利用は年々増えており、学内外からレファレンスを受けるようになっている。

卒業アルバムは、年代によって微差はあるものの、写真とキャプションが見開きで対応する形態や、写真のページの上に置かれたトレーシングペーパーに、人名や建物名のキャプションが記載されている形態が多い。とうぜんそのキャプションは重要な検索ワードとなるため入力は必須だが、それ以外に、入力者の目で得られた情報も別の欄に入力することとなった。例えば、講義風景の写真の場合、アルバムに記載

図 4 （上）『東京帝国大学一覧』従大正四年至大正五年
（下）大正 4 年 12 月医学部卒業記念写真帖

されたキャプションでは「衛生学講義」とだけあるものを、前後の顔写真から推測し、「緒方正規」と補い、「階段教室」などと、実際の写真を見て得られた情報も補記する。その際、必ず同時代の資料である『東京帝国大学一覧』などの、『大学一覧』を確認するようにしている（図 4）。このプロセスを経て入力した検索ワードによって、所属や年代をこえた個人や建物などの、様々なレファレンスに対応できるようになることを目標としている。

『大学一覧』をはじめ、他の学科の同時代のアルバムとも校合させながらキャプションの裏付けを取る一連の作業は、入力者が様々な可能性を予測し、入力方法を検討しながらひとつのものを形作る、一元的ではない「無形」のアーカイブの方法論と共通点がある。このような、ひとつの事柄について多方向から情報を付与するデータの構築によって、利用の扉が少しでも広くなるよう、精度向上のために日々試行錯誤を続けている。

むすびにかえて

卒業アルバムが包含する内容は、人物、研究分野、建物、時代性など、見方次第では情報の宝庫で、着任から間もない私にとって、本学の歴史や特徴を知るうえでの恰好の教材となった。これまでの、15 年以上携わっている顔見世番付、長唄正本、演奏記録のデータ化の経験を一助とし、当館の基盤である公開に向けた資料目録の作成・蓄積にいそしみたい。また、これから多くの資料に触れ、本学のことを少しずつ知ってゆくことで、周縁者ではなく当事者として、また、提供者と利用者の双方の立場を理解し、業務の充実をはかりたい。

（ほしの　あつこ）

---

1 東京文化財研究所無形文化遺産部編『無形の民俗文化財映像記録作成の手引き』（2008 年 3 月）に詳しい。

2 父で長唄三味線方の十世杵屋六左衛門（きねやろくざえもん。1800 ～ 58）とともに携わった、大名や富豪の屋敷で催された 1831 年以降約 36 年間の演奏記録。国立劇場調査養成課編集、長唄資料研究会翻刻・注解『三世杵屋勘五郎筆録 御屋舗番組控 ― 影印・翻刻・注解 ―』一（2017 年 12 月）、二（2018 年 9 月）に詳しい。

3 長唄では、吉住小十郎が、師の四世吉住小三郎の演奏を聴き取って譜に起こしたものが『長唄新稽古本』（通称「小十郎譜」）として刊行され、現在も主流に使われている。

4 拙稿「東京文化財研究所所蔵 フランス・パテ社製 SP レコード長唄『吉原雀』を中心に」（東京文化財研究所『無形文化遺産研究報告』第 9 号、2015 年 3 月）で資料紹介した。

5 町田嘉章編著、邦楽社、1949 年。

6 初代田中凉月・小林責著、国立劇場芸能調査室編集、1992 年。

東京大学文書館デジタル・アーカイブの利用促進のための取り組み

東京大学文書館特任助教　宮本　隆史

2018年8月に本公開した東京大学文書館デジタル・アーカイブ[1]により、同館が保有する資料（特定歴史公文書等および東京大学に関連する歴史資料）の目録の検索と一部のデジタル画像データの閲覧が、オンライン上で可能になった。移管・寄贈された資料の目録情報と作成したデジタル画像データを随時公開できる体制が整った。このデジタル・アーカイブ上で公開する情報については、利用を促進するべくいくつかの取り組みを行なっている。

まず法制度面の取り組みとして、このデジタル・アーカイブ上で公開する情報は、断りないかぎりパブリック・ドメインに属しており、申請等の手続きをすることなく無料で自由に利用できることを示している。東京大学文書館のアーキビストが作成した目録データは、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス「CC0」[2]としてパブリック・ドメインに提供している。また、画像は知られている限り著作権法上の制約が存在していない資料の画像データであり、パブリック・ドメインに属していることを示すため、「PD」マーク[3]を付与している。非営利目的・商用目的を問わず、利用に際して一切の制限がない状態であることが明示されている。目録ページにおけるこれらのライセンス表示により、本来不要な許可申請の問い合わせといった取引コストを回避することができるだけでなく、今後ますます増加すると見込まれる第三者のアプリケーション等による利用を促進できる。こうした措置は、業務上の手間を増やすことなく運用できており、外部からも好ましい評価を得ているだけでなく、公共のデジタル・アーカイブとしてより良く情報提供をするために不可欠と考えている。

つぎに、国際標準にもとづいた方法でデータを提供している。東京大学文書館では目録記述の国際標準であるISAD(G)を基本とした目録項目を設定しているが、これをデジタル・アーカイブ上ではEADやDublin Coreなど標準的なメタデータの語彙に可能な限りマッピングして公開している。また、個々のアイテムの目録は、JSON-LD、RDF/XML、Turtle、N-Triplesなどの標準的なデータ形式で取得可能にしている。標準的な複数の形式でデータ提供することによって、外部システムによる横断検索などの活用を促進できると期待している。ただし、現状では目録の共有用データはデジタル・アーカイブ上で生成しているが、公開システムに依存しない静的データを提供することが長期においては安定的である。これは間もなく実現したいと考えている。一方で、画像データについては、公開と共有のための国際規格として日本でも広まっているIIIF（International Image Interoperability Framework）[4]に部分的に対応している。しかし、サーバ・マシンの制約により、IIIF画像サービス非対応の単純なJPEG画像を利用しているため、提供するIIIFマニフェスト[5]を一部のビューアでは読み込めない場合がある。今後、IIIFへ十分に対応することが望ましいと考えている。

さらに、URLの永続性を高めるべく改善に取り組んでいる。当初このデジタル・アーカイブは、利用するホスティング・サービスに依存した永続性に不安の残るURLで公開せざるをえない状況にあった。永続性を高めるため、2018年12月より東京大学公式ドメインのサブドメインでの公開を実現した。もちろん、公開当初のURLにアクセスすると、現在のURLにリダイレクトされるようにしている。ただし、現状のURLはいまだ公開用システムとして用いているOmeka Sの仕様に依存したものとなっている。将来においてシステムの移行などがあった際に、URLを引き継ぎにくいという問題がある。そのため、公開用システムに依存しないURLを固定アドレスとして設定し、それをシステム上のアドレスにリダイレクトするという方法をとっている。

固定アドレス：
https://uta.u-tokyo.ac.jp/da/id/［識別子］

↓（リダイレクト）

公開用システム上のアドレス（公開用システムに依存）：
https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/document/［識別子］

永続性をより高めるためには、個々の目録データにDOI（Digital Object Identifier）[6]を付与することが望ましいが、これは今後の課題となっている。

東京大学文書館のデジタル・アーカイブでは、このように利用を促進するために改善を重ねている。今後も法制度や技術の変化を見定めて、可能な限りオープンな情報提供を行ない、インターネット利用者の効用を高める正の外部性を生み出すことが、国立公文書館等の指定館としての使命であると考えている。

（みやもと　たかし）

---

1 https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/
2 クリエイティブ・コモンズ　CC0 1.0 全世界　パブリック・ドメイン提供
https://creativecommons.org/publicdomain/zero/1.0/deed.ja
3 https://creativecommons.org/publicdomain/mark/1.0/deed.ja
4 https://iiif.io
5 デジタル化された画像どうしの関係（表示されるべき順序など）や資料の構造などに関する情報を記述する文書。
https://iiif.io/api/presentation/2.1/
6 https://www.doi.org

東京大学文書館デジタル・アーカイブを利用しての所感

帝国データバンク史料館研究員・アーキビスト　橋本　陽

デジタル化したアーカイブズ資料の検索と閲覧を行うためのシステムとして、過去にOmekaを検討したことがある。プログラミングの専門的技術をもった研究者と一緒に、基本的なプラグインの性能を試した。このとき、アーカイブズ記述の階層表現を実装する機能を備えた開発途上のプラグインを見つけ、喜び勇んでインストールした。直後に、画面が真っ白になり、自分の頭も真っ白になったのを覚えている。

この度、公開された東京大学文書館のデジタル・アーカイブ（以下、東大文DAと省略）は、Omekaをベースとしたシステムである。過去に失敗の経験をもつ者として、東大文DAがOmekaを利用した上で公開したと知り、有り体に言って嬉しい気持ちであった。とはいえ、技術的な専門性を持たない本稿執筆者は、このシステムを十分に評価する能力を持たない。したがって、本稿では、アーカイブズ学を多少かじった人間が東大文DAを使用した印象について述べてみたい。

東京大学文書館は、デジタル・アーカイブ構築以前からオーストラリアのシリーズ・システムによって所蔵資料のアーカイブズ記述を作成していた[1]。シリーズ・システムとは、シリーズをアーカイブズ機関が管理する最上単位の階層として目録記述を行う仕組みである。シリーズ記述のほか、シリーズを作成した母体（個人や部署）、この母体が行う業務についても別々に目録記述を作成し、それぞれをリンクさせることにより、資料の内容とそれを取り巻く背景となる情報を総合的に把握できるようになる[2]。シリーズ・システムが真価を発揮するのは、コンピューターを用いた検索システムで実現されたときで、利用者は一つの記述から別の記述へのリンクをたどることで、多様な方面からの検索が可能となる。

東大文DAは、エクスポートできるメタデータの中でもRDF/XMLを実際に見て確認したが、複数のメタデータの標準に準拠して作られている。リンク付けの語彙も含まれているため、異なる目録記述をつなぎ合わせ、シリーズ・システムを実現する機能を備えているシステムであると言って良い。

東大文DAではキーワード検索と階層検索が可能である。キーワード検索は、一般的な図書検索と同様に、タイトル、年代幅、作成者などで資料を探すことができる。階層検索は、所蔵資料の階層を示す樹形図をたどって、検索する仕組みとなっている。樹形図では、資料と資料を作成した部署および個人は区別されていない。歴史資料等のカテゴリーではフォンド、特定歴史公文書等の方ではシリーズが最上位の階層であり、後者の方にシリーズ・システム型の記述が適応されている。

気になったのは記述が未だ十分でない点である。特定歴史公文書等の場合、アーカイブズ記述にとって重要な作成部署の記述はほとんど作られていないため、シリーズがどのような背景で作られたかがわからない。東大の組織変遷は頻繁に起こったようだが、データベースに登録されている部署が少なく、現状ではシリーズ・システムの実現には至っていない。また、仮に登録する部署が充実してきたときに、各シリーズと作成母体の間にある複雑な関係性を樹形図で表現するのは難しくなる。この表示方法は、シリーズ・システムの本家本元であるオーストラリアでも検討された問題である[3]。

マニュアルの記述も追加を望みたい。キーワード検索では、年代域の記入方法がよくわからなかった。また、アーカイブズ学の用語の定義を説明するページが準備された方が、利用者にとって親切である。例えば、階層の名称が利用者にはわかりにくいのではないか。東大文DAの階層名は、上からシリーズ、アイテム、件となっており、オーストラリアの呼称に倣っているようだが[4]、それぞれ何を意味するかを知っておいた方が、階層検索の理解度が増すだろう。特にアイテムは、日本で影響のあるISAD（G）に記載される定義とは違うため、他のアーカイブズでの検索の経験を持つ利用者の混乱を招く可能性がある。

デジタル画像については、文部省往復を閲覧した。現状では一件単位の検索結果からしかアクセスできないようだ。検索の結果、ピンポイントで欲しい情報を得られるとは限らないので、簿冊単位での画像提供を望む声も上がるのではないか。

東大文DAは、公開されたばかりの、いわば器ができた状態であり、中身をこれから入れていく段階にある。この点を承知の上で、細々とした点について述べてきた。しかし、この器は様々な標準に準拠しており、多くの可能性を秘めている。ここに多くの内容を詰め込んでいき、日本で初めてのシリーズ・システムを実現したデジタル・アーカイブが構築されることを期待する。

（はしもと　よう）

---

1 宮本隆史「大学史関係資料のセマンティック・ウェブ技術による活用に向けて」、『東京大学文書館ニュース』vol. 57、2016年、3頁

2 詳細は、森本祥子「全史料協近畿部会第130回例会の記録2 東京大学文書館における資料管理のとりくみについて：理論の理解と実践の試み」、『記録と史料』27巻、2017年、35-42頁を参照

3 Whitelaw, Mitchell. “Visualising Archival Collections: The Visible Archive Project.” *Archives and Manuscripts* 37, 2009, pp. 22-40

4 オーストラリアでは、アイテムの下位の階層は、ドキュメント（Document）であるが、これを件と訳したと思われる。階層の定義は、Acland, Glenda. Document. Item. Series. “Glossary.” *Keeping Archives*. Second Edition. Ellis, Judith (ed). Port Melbourne: Australian Society of Archivists Inc. 1993. p. 469, 473, 479

資料の公開について
（2018 年 8 月 1 日～ 2019 年 1 月 31 日）

上記期間内に整理を終え新たに公開した特定歴史公文書等ならびに歴史資料等は、以下のとおりです。

※概要記述とアイテムリスト（目録）は、当館のデジタル・アーカイブからご確認いただけます（https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/page/home）。

特定歴史公文書等

事務

S0036　学生部旧蔵資料（S0036/SS01 のみ）
S0039　資料室（大学改革）
S0107　財団法人東京大学綜合研究会関係
S0380　入学試験問題
S0381　入学試験合格者名簿
S0384　国立大学協会入試委員会
S0385　国際化推進学部入試特別委員会（AO 室）
S0405　向岡記碑寄贈

大学院・学部

S0382　近代日本法制史料センター運営委員会
S0386　医学教育国際協力研究センター
S0387　インテリジェント・モデリング・ラボラトリー実行委員会
S0388　工学系研究科・工学部　規則改正
S0389　工学系男女共同参画委員会
S0390　8 大学工学部長会議
S0393　附属病院　委員会関係
S0394　附属病院　事故調査委員会
S0395　附属病院　科長会・補佐会
S0396　附属病院　執行諮問会議
S0397　病院運営審議会
S0398　附属病院　病院会議・病院運営会議
S0399　附属病院　教室主任会議
S0400　附属病院　22 世紀医療センター
S0403　東日本大震災関係
S0404　アジア生物資源環境研究センター運営委員会
S0406　公共政策学教育部専門職学位課程　入学試験問題
S0407　明治新聞雑誌文庫運営委員会
S0408　法学政治学研究科　入学試験問題
S0411　農学部学部教育会議

附置研究所

S0212　委員会名簿
S0213　柏キャンパス新営関係
S0214　物性研究所規則改正関係
S0391　名誉教授懇談会
S0410　医科学研究所附属病院遺伝子治療臨床研究審査委員会
S0412　医科学研究所創立記念シンポジウム

全学センター

S0108　保健センター駒場支所資料

国際高等研究所

S0345　サステイナビリティ学連携研究機構運営委員会

機構等

S0082　東京大学史関係収集資料

歴史資料等

その他

F0060　学生問題研究所資料
F0200　津田秀秋関係資料
F0235　藤吉日出男関係資料
F0238　元教職員関係資料
F0239　東京第一大学区開成学校開業式之図
F0240　ヨハネス・ルートビッヒ・ヤンソン関係資料

上記期間中も個人や団体から多数の資料を寄贈いただきました。ありがとうございます。今後も引き続き、東京大学に関係する資料・学内刊行物のご寄贈をお待ちしています。

文書館トピックス　木島隆康教授に聞く、絵画の修復・保存～渡辺洪基肖像画ほか～

12 月 20 日、本郷本館において東京藝術大学・木島隆康教授（文化財保存学専攻）にお越しいただき、当館所蔵の油画や錦絵などの修復や保存方法についてご指導を受けました。

事の始まりは、他館へ渡辺洪基肖像画を貸し出した際、「表面にカビが付着していますよ。」と指摘を受けたことによります。

木島先生のお見立てによると、この油画の顔に付着している黒い 0.5 ミリ四方の点々はハエのフンであり、胸の部分にかけてみられる白い点々は、それが剥がれた痕ではないかとのことでした。点々は模様ではなかったのです！ この付着物の汚れを落とすには、水で濡らした脱脂綿を固く絞り、アンモニアを少し混ぜて拭くのだそうです。また、表面全体の汚れも見受けられるため、色の明るさを取り戻すために粉消しゴムを使ったドライクリーニングのテクニックも教えていただきました。さらに、キャンバスにゆるみが生じていることも判明しました。キャンバスの張力を保つために固定されている裏側のくさびが欠損していたのです。複雑な劣化状況で難題山積ですが、先生より専門家による修復を勧められ、それが研究事業として行える可能性もご教示いただいたので、明るい兆しの見える難題であると執筆者は悟りました。

さいごに、木島先生は「この絵はとても優しい顔をしており、肖像画として大変いい作品ですね。」とおっしゃいました。藝大生に課せられる伝統ある卒業制作（自画像）の修復を、修士課程の学生全員で行う共同修復も採用した木島先生です。修復家としてだけでなく、教育の現場においても熱心な先生からの含蓄あるお言葉に、一同熱心に耳を傾けました。

（小根山　美鈴）

業務日誌（抄）
（2018 年 8 月～ 2019 年 1 月）

※（本）: 於本郷本館、（柏）: 於柏分館

8 月 1 日	環境整備チームによるアルバム類クリーニング（～2 日）（柏）
8 月 3 日	手嶋精一関係文書マイクロフィルムのデジタル化、完了（本）
8 月 6 日	学習院大学大学院アーカイブズ学専攻アーカイブズ実習生 3 名受入（前半：6 ～ 9 日）
8 月 15 日	森本、国立近現代建築資料館第 9 回情報小委員会出席（国立近現代建築資料館）
	環境整備チームによる歴史資料等のクリーニング（柏）
8 月 16 日	茂里美樹子氏、清水玲子氏（茂里一紘氏経由）より一瀬智司関係資料受入（本）
8 月 20 日	学習院大学大学院アーカイブズ学専攻アーカイブズ実習生 2 名受入（後半：20 ～ 24 日）（本）
8 月 21 日	矢内原契氏より矢内原忠雄関係資料追加受入（本）
8 月 22 日	秋山、星野、「学術資産としての東京大学」研究会参加（本）
8 月 23 日	東京工業大学博物館資史料館部門公文書室より 2 名視察（本）
	環境整備チームによる歴史資料等の資料クリーニング（柏）
	広報センターより展示・配布期間終了刊行物移管（本）
8 月 27 日	東京大学文書館運営委員会開催（本）
	森本、国立公文書館「アーカイブズ研修Ⅰ」へ講師派遣
	星野、国立公文書館主催「アーカイブズ研修Ⅰ」参加（～ 8 月 31 日）
	収蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布（本）
8 月 28 日	第 46 回館員打ち合わせ（柏）
8 月 31 日	デジタル・アーカイブ本公開
9 月 3 日	学習院大学大学院アーカイブズ学専攻アーカイブズ実習生 1 名受入（後半：3 ～ 7 日）（柏）
	森本、秋山、「東京大学ビジョン 2020 中間報告書に係る職員講話会」参加（学内）
9 月 6 日	米沢市上杉博物館へ資料 3 点貸出
	村上、科学研究費助成事業公募要領等説明会参加（本）
9 月 7 日	村上、知的財産講習会参加（本）
9 月 10 日	森本、国立科学博物館「科学者資料デジタルアーカイブの研究開発」に関する打ち合せ（本）
9 月 12 日	川口辰郎氏より中小左次関係資料追加受入（本）
	社会連携推進課、東北震災関係文書相談のため来館（本）
9 月 13 日	小根山、愛媛県西予市役所水損行政文書レスキューボランティア参加（～ 9 月 17 日）
9 月 18 日	森本、「砂防工学研究室資料」調査（農学部）
	宮本、京都大学文書館 1 名見学対応（本）
9 月 19 日	新潟市歴史文化課 1 名視察（本・柏）
9 月 21 日	川口辰郎氏より中小左次関係資料追加受入（柏）
9 月 25 日	第 47 回館員打ち合わせ（本）
9 月 26 日	森本、秋山、法務課書庫調査（～ 9 月 27 日）（本）
	収蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布（本）
9 月 28 日	駒場寮同窓会より駒場寮関係資料受入（柏）
	森本、関東弁護士会連合会シンポジウム参加（ウェスティンホテル東京）
	森本、第 68 回内閣府公文書管理委員会出席
10 月 1 日	森本、工学・情報理工学図書館貴重書調査（本）
10 月 3 日	森本、秋山、村上、旧第二外科所蔵資料調査（本）
	森本、秋山、宮本、矢内原科研研究会出席（本）
	記録管理学会 2 名視察（柏）
10 月 5 日	秋山、科学研究費による出張（～ 6 日）（広島大学文書館）
10 月 9 日	森本、国立公文書館と打ち合わせ（本）
10 月 11 日	秋山、講演出講（札幌聴覚障害者協会）
10 月 12 日	国立近現代建築資料館へ資料 1 点貸出
10 月 15 日	工学・情報理工学図書館1名、福岡共同公文書館1名視察（本）
	肝胆膵外科より佐藤三吉関係映像フィルム 2 本、デジタル化のため預かり（本）
10 月 20 日	第 17 回東京大学ホームカミングデイ出展（本）
10 月 22 日	森本、国立近現代建築資料館「明治期における官立高等教育施設の群像」展内覧会参加
10 月 25 日	森本、第 69 回内閣府公文書管理委員会出席
10 月 26 日	柏一般公開 2018「柏でわくわく知の探検」（～ 27 日）（柏）
10 月 29 日	森本、アーキビストの職務基準書に関する検討会議出席（国立公文書館）
	矢内原科研メンバー、資料確認のため来館（柏）
10 月 30 日	第 48 回館員打ち合わせ（柏）
	佐藤顧問、秋山、吉川弘之元総長へインタビュー（第 3 回）（JST）
10 月 31 日	収蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布（本）
	SC201 の書棚固定（本）
10 月 31 日	除湿機排水作業終了（柏）
	全室空調停止（本・柏）
11 月 1 日	秋山、科学研究費による出張（～ 3 日）（神戸大学大学文書史料室、大阪大学アーカイブズ、京都大学大学文書館）
11 月 7 日	評議会議事録マイクロフィルム 41 本、百五十年史 WG でのデジタル化のため業者へ貸出
	森本、村上、附属図書館と新図書館自動書庫利用に関する打ち合わせ（本）
	市村宗武氏より市村宗武関係資料受入（柏）
11 月 8 日	森本、秋山、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会出席（～ 9 日）（沖縄）
11 月 10 日	宮本、科学研究費による出張（～ 13 日）（大牟田市立図書館）
11 月 13 日	百五十年史編纂準備 WG（4 名）視察および資料調査のため柏分館に来館
11 月 19 日	森本、第 70 回内閣府公文書管理委員会出席
11 月 20 日	佐藤顧問、秋山、吉川弘之元総長へインタビュー（第 4 回）（JST）
11 月 21 日	中央大学広報室大学史資料課より加藤明雄関係資料受入（柏）
	村上、平成 30 年度会計業務勉強会参加（本）
11 月 27 日	佐藤顧問、秋山、吉川弘之元総長へインタビュー（第 5 回）（JST）
	森本、秋山、宮本、矢内原科研研究会出席（本）
11 月 28 日	第 49 回館員打ち合わせ（本）
	国立近現代建築資料館見学（全員）
11 月 29 日	文書館より百五十年史編纂準備 WG 作業室へ資料搬出
	資料移送（本郷⇔柏）
11 月 30 日	秋山、柏図書館展示に関する打合せ（柏）
	駒場寮同窓会より駒場寮関係資料追加受入（柏）
	国立近現代建築資料館より資料 1 点返却
	収蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布（本）
12 月 3 日	森本、国立公文書館と職務基準書について打ち合わせ（本）
12 月 4 日	森本、東洋文化研究所野久保技術専門職員と資料撮影に関する打ち合わせ、資料貸出（本）
	北海道大学大学文書館 3 名来訪（本）
12 月 7 日	森本、国立科学博物館「科学者資料デジタルアーカイブの研究開発」に関する打ち合せ（本）
	秋山、科学研究費による出張（～ 8 日）（名古屋大学大学文書資料室、名古屋市市政資料館）
12 月 11 日	佐藤顧問、秋山、吉川弘之元総長へインタビュー（第 6 回）（JST）
12 月 14 日	森本、国立科学博物館「科学者資料デジタルアーカイブの研究開発」に関する打ち合せ（本）
	秋山、科学研究費による出張（～ 15 日）（九州大学大学文書館）
12 月 16 日	秋山、科学研究費による出張（～ 17 日）（東北大学史料館）
12 月 18 日	佐藤顧問、秋山、吉川弘之元総長へインタビュー（第 7 回）（JST）
12 月 19 日	森本、第 71 回内閣府公文書管理委員会出席
	森本、アーキビストの職務基準書に関する検討会議出席（国立公文書館）
12 月 20 日	東京藝術大学木島隆康教授による絵画の保存・修復レクチャー（森本、小根山、星野、村上、佐藤）（本）
12 月 21 日	農学部農学生命科学図書館よりヨハネス・ルードビッヒ・ヤンソン関係資料 4 点受入（本）
12 月 25 日	佐藤顧問、森本、秋山、百五十年史編纂準備 WG 陪席（本）
	森本、駒場学生自治会資料調査（駒場）
12 月 26 日	第 50 回館員打ち合わせ（柏）
12 月 27 日	収蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布（本）
1 月 12 日	森本、国立近現代建築資料館ギャラリートーク「大学アーカイブズの中の建築資料」にて講演
1 月 17 日	NHK ニュースウォッチ 9 取材対応（柏）
	小根山、柏総合研究棟建物管理専門委員会代理出席（柏）
1 月 18 日	森本、有泉亨資料調査（社会科学研究所）
1 月 22 日	佐藤顧問、秋山、吉川弘之元総長へインタビュー（第 8 回）（JST）
	宮本、総合研究棟安全衛生管理専門委員会出席（柏）
1 月 28 日	第 51 回館員打ち合わせ（本）
	森本、文書管理説明会にて説明出席。スタッフ全員参加（本）
1 月 29 日	森本、三重県公文書等管理条例検討懇話会出席（三重県）
1 月 31 日	収蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布（本）

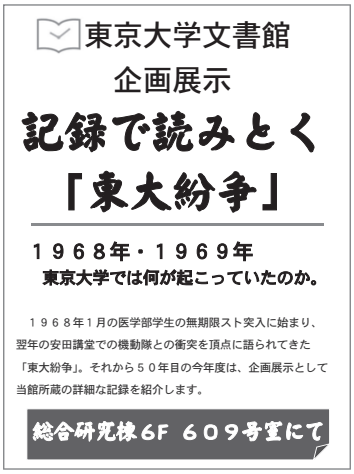
文　書　館　ト　ピ　ッ　ク　ス

柏キャンパス一般公開～「知の蔵、文書館」へようこそ

今年も柏キャンパス一般公開が2018年10月27・28日に開催され、文書館もガイドツアーと企画展示で参加しました。天候にも恵まれ、両日で233名が来場、じっくり「知の蔵、文書館」を体感していただきました。

ガイドのもと書庫内を探検する参加者たち

ガイドツアーでは「文書館ってどんなとこ？」と銘打って、書庫内をめぐりつつ、文書館の文書収集・整理業務や保存環境の工夫など、普段利用者には触れにくい活動を紹介しました。そして各書架に所蔵資料を展示し、参加者が“書庫探検をしながら資料を発見する”ような形式としました。錦絵や教育勅語、恩賜の銀時計、夏目漱石（金之助）や高橋是清ゆかりの公文書、赤門の守衛日誌…まさに東京大学の歴史を語る資料たちに、参加者も興味津々でした。「実物の御名御璽を初めて見た」、「夏目漱石のお給料は高いのね」…そんな声もちらほらと。文書館の役割について深く知っていただく機会になったのではないでしょうか。



企画展示ポスター

また企画展示では「記録で読みとく『東大紛争』」を開催しました。「東大紛争」といわれた1968年度の学生運動から、今年は50年の節目にあたります。そこで、従来あまり活用されてこなかった学内記録を中心に展示をしました。大学本部が作成した「紛争日誌」には分刻みのキャンパス内動向が記録され、職員撮影による写真アルバムや、秩父宮ラグビー場での団体交渉の音声記録、大量のビラからは生々しい実態が見えてきます。そして紛争を契機に広がった、大学改革を模索する動きも紹介しました。来場者の年齢は、当時を体験した世代（秩父宮ラグビー場の参加者もいました！）から小学生まで様々でしたが、それぞれに「何がおこっていたのか」「なぜそうしたことがおこったのか」という問いに対し、詳細な記録を真剣に読み込み、考えている姿が多く見受けられ大変印象的でした。

メモをとりながら展示をみる若い来場者も

なお、本企画には継続展示の要望が多く寄せられたため、柏図書館で4月より関連展示を行います。詳細が決定次第、当館ウェブサイト等で告知いたしますのでご期待ください。

（秋山　淳子）

東京大学文書館ニュース　第62号　ISSN 0915-3284

発行日：2019年3月31日（年2回発行）
編集・発行：東京大学文書館
〒113-8654　東京都文京区本郷7－3－1
電話：03（5841）2077（直）
https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/index.html

印刷所：松枝印刷株式会社